慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	出版物上のタールトン : 脱神話化から再史実化へ
Sub Title	Tarlton in print: From myth to history
Author	小町谷, 尚子(Komachiya, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.61 (2012. 10) ,p.87- 105
JaLC DOI	
Abstract	Richard Tarlton, the Elizabethan clown, is frequently mentioned in many Elizabethan and Jacobean written works, one of which, Tarlton's Jests, gives accounts of the clown in performance and print. However, these reports are mixed up with popular legends and fables, so at this distance in time and without firm evidence, we cannot be certain that the published document is loyal to the authentic jests of Tarlton. On the other hand, Tarlton's Jests certainly provides clear evidence that the art of clowning in the late Elizabethan age relied heavily on the ability to come up with witty improvised responses to comments or requests from the audience. Its publication in later times also proves that Tarlton's reputation and popularity lived on into the Jacobean age. Bridging the divide between theatre history and literary criticism, this study takes up the print industry as an agent for tracing the careers of clowns and fools in Renaissance drama. It examines how the image of Tarlton passed into literary texts, especially via jest-book printing. Through an examination of Tarlton's Jests, it also discusses the influence of Richard Tarlton: he was historically accepted as a brand or influential name in literary texts relating to contemporary religious controversy and pamphlet writing. The myths surrounding Tarlton will be deciphered to explain the decisive role played by this instantly recognisable and immortalised clown in the overall evolution of the English clown. Historicised, Tarlton was endowed with a material identity, which completes the coming-into-being of clowns and fools in early modern play texts.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20121031-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

出版物上のタールトン
——脱神話化から再史実化へ[1)]

小 町 谷 尚 子

タールトンの名前は道化役者，即興の機知，ジグ，エリザベス女王の宮廷道化と常に結びつけられてきた。これらのプロフィールは，1588 年の彼の死後に出版された印刷物に繰り返し見られるが，実のところ，出版業に携わる人々が書き直し，作り上げた神話である。死後すぐに起きた宗教論争から劇場閉鎖までのおよそ 50 年間に生まれ，広がり，定着した，この神話に疑問が呈されることはなく，その成立過程に光が当てられることはなかったのである。

登場人物としての道化が研究対象となるとき，その役割や機能に焦点があてられて解釈されてきたが，そうしたアプローチが道化役者タールトンの議論を単純なものにしてしまった。例えば，Andrew Gurr や Richard Beadle は，登場人物として創作された道化と演じ手としての道化役者の関係を指摘し，*Tarlton's Jests* という笑話集（jest-book）に基づいて，タールトン像を明らかにしようと試みている[2)]。Gurr はタールトンの作り出す笑いは話集に収められた普遍的な笑いの記述に元をたどれるとし，さらに，タールトン自身の即興性によって劇の役と異なる笑いが作り出されたと見た[3)]。一方，Beadle は *Two Gentlemen of Verona* の Lance と彼の犬 Crab は笑話集の一逸話を反映したものだと論じた[4)]。他の学者も同様で，笑話集自体の信頼性に疑問を投げかけることなく，タールトンのおどけた芝居を取り上げる際にはこの笑話集にあたってきた[5)]。しかし，この笑話

集を鵜呑みにすることは危険である。当時出版された笑話集には，先行する笑話集の逸話の登場人物や地名，小道具が折々の情勢に応じて差し替えたものが多くあった。*Tarlton's Jests* においても，主人公を単にタールトンに替えただけのものばかりか，中にはタールトンの活躍した時期よりも50年ほど前に出版された笑話集から採った逸話もある。「タールトン」という名前の磁力を遮断して，ステージから書籍のページへとどのようにタールトンが書き込まれたか，刷り込まれたかを明らかにすることは，道化の代表格として取り上げられるようになったタールトンと，さらには彼に連なる道化の正体を捉え直すきっかけになるはずである。

タールトン神話が成立する際に媒介となった力は，出版物である。タールトンの名前を借りることは笑話集に限って見られることではない。まず，タールトンについての記述は多くは死後に出版されたものを元にしていることが多いことを忘れてはならない。Alexandra Halasz が John Stow の年代記の記述に拠って，タールトンは有名人のイメージを持って時代に循環し，彼の名声が確立したと主張しているが，その元となった循環の力は明らかにはされていない[6)]。他の道化研究者たち，Edwin Nungezer, Robert Weimann, David Wiles, John H. Astington, Mark Eccles も同様で，恣意的なサンプリングによって，タールトンは伝説的道化であると結論してしまう[7)]。だが，タールトンの名前は出版物の本文だけでなく，表紙や序文，文責表示などのパラテクストにも多数認められる（表1参照）。パンフレットのタイトルではインパクトのある集客力として，逸話やニュース記事では説得力のある語り部として利用されているのである。「タールトン」という役者と読者をつなぐインターフェイスである出版印刷業者を経て，次第に彼の神話が作り上げられていることがわかる。タールトンの名前をかぶせることで，書き物に意味を持たせる，注目を集める，という操作が行われ，名前のロゴ的利用がタールトン神話を際立たせていったと考えられる。神話は大きく3段階，パンフレットにおける名前借用の時代，タールトンの名前を前面に押し出した出版物の時代，Thomas Fuller や

表 1　Tarlton's name in paratexts (td. : trade date)

date	title	STC	author	printer	paratexts
1570	*A Very Lamentable and Woeful Discourse of the Fierce Floods*	23688		Entered 1570–71.	It ends with 'quod Richard Tarlton'.
8 Apr. 1580	*A Warning for the Wise*	5259	Thomas Churchyard	Iohn Allde and Nicholas Lyng Entered to H. Bynneman 8 April [1580]	Tarlton's name at the end of the report
1580	*A Bright Burning Beacon*	11037	Friedrich Nausea	Henrie Denham Entered 27 June [1580.]	The author placed Tarlton immediately after Thomas Churchyard in his list of writers' names.
10 Dec. 1576	*Tarletons toyes*		?	Richard Jones (td. 1564–1602)	[Title?]
2 Apr. 1577	*A Flourish upon Fancy*	3654	Nicholas Breton	W. Howe for Richard Jones	
	The Toys of an Idle Head				It might be mistakenly identified as *Tarletons* toyes.
1578	*Tarlton's Tragical Treatises*	23687.5	?	By Henry Bynneman (td. 1566–83)	[Title]
1582	repr. *A Flourish upon Fancy and The Toys of an Idle Head*	3655	Nicholas Breton	Richard Jones	
1585	repr. *A Flourish upon Fancy and The Toys of an Idle Head*	3655.5	Nicholas Breton	Richard Jones	

Edmund Bohun による歴史的記述出版の時代，を経て発達するが，拙稿では最後の時代を除き，1640 年以前のパンフレットと笑話集の出版史でタールトンの名前が史実化される過程を取り上げ，印刷業の文芸への影響力を推し量る。

1　初期：パラテクスト中の主たる名前借用

表 1 に挙げたように，タールトンの生前のニュース記事にはタールトンの名前が記載されているものが数点認められる。1570 年に起きた洪水の報告書では，あたかも記事の実際の報告者であるかのようにタールトンの名前が記されている。また，1580 年の地震の報告書では，タールトンの名前は作家 Arthur Golding（Ovid の翻訳者），Abraham Fleming（Holinshed の『年代記』編者）とともに報告者として列挙されている[8)]。これは彼の名前が記事に信憑性を与えるばかりでなく，これらの作家に並びうるだけの大物扱いを受けたことの証拠である。一方，現存しない ‘Tarletons toyes’ と呼ばれるテキストもまた 16 世紀後半に流通していた。Nashe などの作家が，滑稽ではあるが冒涜的な物語を指し示す際のテンプレート表現として用いている。このテキストの性質については「機知に富み，滑稽で，しかしながら不敬である」として[9)]，‘Tarletons toyes’ のような物語は教会の説教壇には不向きであると断じた作家もおり，このテキストのタイトルから読み出されるタールトンという名前の醸し出すイメージは決して好ましいものではない。

さらに，即興の機知に富むタールトンのイメージは，マーティン・マープレリト論争や Harvey-Nashe 論争が触媒となって広まった。マーティンのプレゼンテーション戦略がタールトンの道化的行為に通じるものと推論する現代の学者もいる。そうした学者たちは反マーティン派がマーティンに対する反撃文で用いた比喩を元に論を展開しており，確たる証拠を挙げてはいない。マーティン派のパンフレットにはタールトンの名前は僅か 2 度しか出てこない。それらの記述の一つは John Bridges に言及する際に

比喩的に用いたもので，特にタールトンの役者としての才能を取り上げているわけではない[10)]。一方，反マーティン派はマーティン派を機知が足りないとして相手を皮肉る手段として積極的にタールトンを比較の対象に使った。たとえば，John Lyly は，舞台上のタールトンの滑稽なイメージと別の笑話集 *Scoggin's Jest*s のおかしみを接ぎ木して，たたみ掛けることで，国教会を攻撃するマーティン派をばかげていると揶揄した。

> Now *Tarleton's* dead the Consort lackes a vice:
> For knaue and foole thou maist beare prick and price.
>
> The sacred sect and perfect pure precise,
> Whose cause must be by *Scoggins* iests mainteinde,
> Ye shewe although that purple Apes disguise,
> Yet Apes are still, and so must be disdainde.[11)]

一方，マーティン派 Job Throckmorton は，*Scoggin's Jests* という笑話集を否定しながら，自分たちの戦略を正当化した[12)]。反マーティン派が戦術として，機知や冗談を書き表した笑話集と舞台の道化役者タールトンとを同列化し，そしてそれゆえに曖昧になったイメージが，後世に伝わるタールトン神話形成に大きく関与したのである。Edward Arber を始めとして，現代の批評家 Travis L. Summersgill，Donald J. McGinn，Patrick Collinson に至るまで，マーティンの戦略をタールトンに通じるものとするのは，反マーティン派の記述から推理したものであって，タールトンの実像に迫るものではない[13)]。亡くなってまもなく 1589–90 年のわずかの間に起こったマーティン・マープレリト論争において，タールトンは効果的な今日的比喩，時流に乗った比喩として使われたことで，以後出版界に流通してゆくことになったと認めることができる。さらに，Scott McMillin と Sally-Beth Maclean は The Queen's Men のスタープレイヤーとしてのタールト

ンがプロパガンダの役割を果たしていることを議論し，タールトンの名前の有効性を唱える論の裏付けとして，マーティン・マープレリト論争におけるタールトンを取り上げている。

> Martin Marprelate spoke uproariously, and the source of the uproar was the spontaneous jest, the impious lampoon, the improvised satire —it was Tarlton and one phase of the theatre of the Queen's Men turned into vitriolic and irrepressible prose. The earlier reformers had despised the theatre. Martin outdid them by using it. As his opponents know, the most popular actors of the day were being taken as a model.[14)]

この論もまた反マーティン派の記述からの推理に過ぎない。私たちはこの出発点における誤解を正さなくてはならないだろう。

タールトンのイメージの多様化は，Harvey と Nashe の論争にも認められる。

> The whole Vniuersitie hyst at him *Tarlton* at the Theator made iests of him, and *Elderton* consumed his ale-crammed nose to nothing, in bearbayting him with whole bundles of ballets.[15)]

このNasheの記述はタールトンを語る上で良く取り上げられるものであり，しかも，この記述はそっくりそのまま，歴史家 Anthony à Wood が自著に転載したこともあってタールトンは機知の名手というイメージが定着したといっても良い。この記述にいたるまでに Nashe と Harvey の 2 人のパンフレット作家がタールトンの名前から新語を作って，論争の武器としたことがこのイメージ決定に大きく寄与している。Harvey は Nashe を皮肉り，彼の即興の機知を “Tarltonizing wit”「タールトンの機知の模倣に過ぎな

い」と評したし，さらに機知はあってもタールトンが持っていた“Tarltonisme”「機知の芸術性」はないとコメントした。すると，Nasheは“Tarltonizer”「タールトン風の機知を持つ使い手」であることが誇りであると反撃している。2人は，役者としてのアイデンティティよりも，「即興の機知を操る人」としてのアイデンティティをタールトン像に与えたのである。

2　笑話集 *Tarlton's Jests* の成立

現存する *Tarlton's Jests* 以前の1590年に発表された2つのパンフレットにはタールトンの名前がある。*Tarlton's News out of Purgatory* には主題に使われ，*The Cobbler of Canterbury* は“Or An Invective against *Tarlton's News out of Purgatory*”という記述を副題に持つ[16)]。これらのパンフレットでは，タールトンは社会風刺を行う者，筆者の代弁者として用いられている。死後わずか数年で，さらに新しい側面が合成されていく様子をこれらの出版経緯から見て取ることができる。

Tarlton's News out of Purgatory の大枠は，Robin Goodfellowがタールトンにpurgatoryとはどのようなところかを尋ね，タールトンがそれに返答するスタイルとなっている。タールトンはパンフレットの目的にかなう報告者としてパンフレット上で幽霊として登場し，宗教的な緊張を緩和し，陽気な冗談で神学論争を嘲笑する。批評を正当化するチャンネル，滑稽な批評への案内人，敵対対象とのバッファーとしてタールトンはうってつけの人物像として使われたのである。一方，*The Cobbler of Canterbury* の筆者は，*Tarlton's News out of Purgatory* に対する反論・非難の立場を取って語る。どちらのパンフレットもその序文あるいは最初の逸話にタールトンを登場させて，筆者はタールトンよりも優れた機知を書くという目的を明らかにする。これらのタールトンの名前の借用は，1590年にはタールトンという役者と彼の機知が世間に広く知られていたことを裏書きするものである。死後2年でタールトンの名前は，優れた機知の使い手，人々を

納得させる風刺を利かせることのできる伝達路として常道的な扱いを受けていることがわかる。

Henry Chettle の *Kind-Heart's Dream* でも，著者の考えを伝える手段としてタールトンが使われている。Halasz はタールトンを 'a figure of national identity' と評したが[17]，タールトンは特定の思想や話題に限って使われているのではなく，これまで見てきたように，万能のエージェントとして出版物においては多様な現れ方をする。成長市場の印刷業界でこれらのパンフレットと笑話集において繰り返し名前が利用され，結果として，機知の権化，笑いを司る道化役者としてのタールトンが定着してゆく過程に，今に伝わる虚像のイメージが作り出されていったことを見て取ることができる。またそのイメージの増幅の過程は近代初期の道化の発達と時期を同じくしていることは特筆すべきことである。

さて，ここで，タールトンの名前をタイトル中に持つ作品，前述の *Tarlton's News out of Purgatory* と *The Cobbler of Canterbury* の二つのパンフレットに加え，笑話集 *Tarlton's Jests* の成立と流通を見ておく必要がある。なぜなら，表 2 及び表 3 にまとめたように，これらの出版には共通する印刷業者 Robert Robinson が係わるからである。*Tarlton's Jests* は Thomas Pavier によって 1600 年にその第 2 部が書籍出版業組合記録にエントリーされて以後しばらくの間，神学作品とともに，未亡人や息子，弟子，印刷所あるいは印刷機器を買い取った後継の同業者の間でライセンスが受け継がれた。記録では，1613 年，1620 年の版のあと，John Budge を経て 1626 年 Robert Allot に譲られ，1630 年，1638 年の版が現存する。

Tarlton's Jests の重要性は，笑話集の出版ブームとの時間的重なりにある。1590 年，*Tarlton's News out of Purgatory* と *The Cobbler of Canterbury* の 2 作品が同じ Robert Robinson によって印刷されている。*Tarlton's News out of Purgatory* とは内容的には無関係の *The Cobbler of Canterbury* が副題にタールトンの名前を用いているのは，前述したように，タールトンが風刺の代弁者として最適であったことに加え，広告・販売目的もあっ

表２　The transmission of the text of *Tarlton's Jests* (td. : trade date)

date	copy holder or publication information (bookseller & printer)	STC	other publications of jest-book & memorable events
Aug 4, 1600	entered by Thomas Pavier (td. 1600–1625)		
	John Budge (td. 1606–25)		
Feb 21, 1609	Clement Knight (td. 1594–1630)		
1613	for John Budge by Thomas Snodham (td. 1603–25) the 1st extant edition	23683.3	*Scoggin's Jests* (a sequel to the original edition) Full title: *Scoggins iestes. Wherein is declared his pleasant pastimes in France, and of his meriments among the fryers: full of delight and honest mirth* (STC 21851)
			1614 &1615 John Budge by Thomas Snodham William Cowper's *The bishop of Galloway his apologie* (STC 5914 & STC 5915)
1620		23683.5	
Sep. 4, 1626	Robert Allot (td. 1625–35)		*Scoggin's Jests* (a revived edition of the original edition) & the 2nd jest-book boom Full title: *The first and best part of Scoggins iests: full of witty mirth and pelasant shifts, done by him in France, and other places: being a preseruatiue against melancholy. Gathered by Andrew Boord, Doctor of Physicke* (STC 21850.7)
c.1630	by George Purslowe (td. 1609–32)	23683.7	*A Banquet of Jests*
July 1, 1637	John Legat and Andrew Crooke via Mary Alott (the widow of Robert)		
1638	for Andrew Crook (td. 1629–74) by John Haviland (td. 1613–38)	23684	Haviland took business from Elizabeth Purslowe, George's widow

表３　Transmission of the texts of *Tarlton's News out of Purgatory and The Cobbler of Canterbury*

Tarlton's News out of Purgatory (1590) from Robert Robinson to George Purslowe

date	publisher(s)	STC	event(s) & indicator person(s)	printer
26 June 1590	entered by Thomas Gubbin (td. 1587–1629) Thomas Newman (td. 1587–1598)	23685	printing stuff from the widow of Middleton a shop from Henry Middleton (td. 1567–1598)	**Robert Robinson** (td. 1583–97)
1606			**Robinson's widow** remarried to Richard Braddock (td. 1577–1611) his printing house was bought John Haviland and William Hall	
1609			resold to John Beale and John Pindley	
1613			Pindley's widow married to George Purslowe	
1614	by Thomas East (td. 1565–1608); adopted son Thomas Snodham			
1630	sold by Francis Grove	23687		George Purslowe

Tarlton's News out of Purgatory (1593) from Robert Robinson to Edward Allde

date	publisher(s)	STC	event(s) & indicator person(s)	printer
1593?	Edward White	23685a	The device on the title page is common to the first edition by **Robert Robinson** in 1590. Richard Braddock also used the same device.	Edward Allde (td. 1584–1628)

The Cobbler of Canterbury from John Newbery to Nathaniel Butter

date	publisher(s)	STC	events & indicator persons	printer
1590		4579	The device on the title page is used by Robert Robinson.	**by Robert Robinson**
12 June, 1600	entered by John Newbery		Joan Newbery, Nathaniel Butter's mother had already remarried John Newbery	by Valentine Simmes (td. 1585–1622)
1608	for Nathaniel Butter (td. 1590–1605)	4580		by Nicholas Okes (td. 1603–39)
1614	for Nathaniel Butter	4580.5		Thomas Snodham
1630	by Nathaniel Butter	4581	renamed with The Tinker of Turvey	

たと考えられる。つまり，風刺の代弁者としてタールトンは，少なくとも *The Tinker of Turvey* とタイトルが付け替えられた 1630 年までは[18]，その出版物の内容が社会風刺パンフレットであることの指標として印刷業者の間で利用された名前であることを示している。

ところで，1630 年に *Tarlton's Jests* が再度出版されたときに，*Tarlton's News out of Purgatory* もまた再出版されている。タールトンという名前に対する関心，タールトンという名前の持つ引力がここにも読み取れる。しかし同時に，同年に *The Cobbler of Canterbury* が *The Tinker of Turvey* というタイトルで再出版されたとき，*Tarlton's News out of Purgatory* への反論とする副題も消えていることを見逃すことはできない。タールトンという名前の持つ意味はこの頃どう変わったのだろうか。

1630 年は笑話集の系譜における一つの節目の年である。この年，*A Banquet of Jests* が Richard Royston によって出版されたが，この笑話集の表紙には，他の笑話集やパンフレットと異なり，道化の名前が記されていない。*The Cobbler of Canterbury* が副題を削り，*The Tinker of Turvey* にタイトルを変更したことと，道化の名前が表に出ない *A Banquet of Jests* の登場は，1630 年以降急速にタールトン及び道化の名前が販売促進力を持たなくなったことを示唆するものと考えてよい。この事実を逆に芝居における道化の衰退に敷衍して言えば，Richard Brome や Ben Jonson がタールトンやケンプの道化芝居を回顧的に懐かしんで言及した時期と重なり合うことに気が付く[19]。

3　笑話集ブームとタールトン神話の位置づけ

17 世紀初頭には，主だった出版業者により笑話集が次々と出され，中には繰り返し印刷されているものもある。1626 年には，お笑いの権化を主人公とするものとして引き合いに出されることが多かった *Scoggin's Jests* がオリジナルのエントリー 1565–66 年から 60 年を経て再度出版されている。表 4 に記したように，1600 年代から 1630 年ころまでは，

表 4　The second jest-book boom

Publications		STC	printer/seller
1607	*Peele's Jests (Merrie conceited iests of George Peele Gentleman sometimes a student in Oxford)*	19541	for Francis Faulkner (or Falconer, td. 1605–48) by Nicholas Okes (td. 1603–39)
1627	*Peele's Jests (Merrie conceited iests of George Peele Gentleman sometimes a student in Oxford)*	19543	for Francis Faulkner by George Purslowe
1626	*Scoggin's Jests*	21850.7	by[Miles Flesher] for Francis Williams
c.1630	*Tarlton's Jests*	23683.7	George Purslowe
1630	*Tarlton's News out of Purgatory*	23687	George Purslowe
1630s	*Tarletons Medley* (1630s)	19231.5 19231,1 9258	for Francis Grove (td. 1623–61)
1630	*The Tinker of Turvey* (renamed edition of *The Cobbler of Canterbury*)	4581	for Nathaniel Butter
1630	*A Banquet of Jests*	1368	entered by Richard Royston(td. 1628–86) on 10 May 1630 printed for Royston by Miles Flesher (or Fletcher, td. 1611–64)
1632?	*A Banquet of Jests*	1368.5	for Richard Royston by Miles Flesher
1633	*A Banquet of Jests*	1372	for Richard Royston by Miles Flesher
1634	*A Banquet of Jests*	1369	for Richard Royston by Miles Flesher
1636	*A Banquet of Jests: . . . The first part*	1369.5	for Richard Royston by Miles Flesher
1636	*A Banquet of Jests: . . . The second part*	1373	for Richard Royston by Miles Flesher
1639	*A Banquet of Jests*	1370	for Richard Royston by Thomas Cotes (td. 1620–41)
1640	*A Banquet of Jests: . . .In two bookes*	1371	for Richard Royston by Miles Flesher (td. 1611–64)
1629	*Pasquil's Jests*	19452	J. Browne, and printed by Miles Flesher
1632	*Pasquil's Jests*	19453	J. Browne, and printed by Miles Flesher
1635	*Pasquil's Jests*	19453.3	J. Browne, and printed by Miles Flesher

Tarlton's Jests，*Scoggin's Jests* の続編（オリジナルの再版を 13 年遡る 1613 年出版）を含め，道化者や有名人の名前をかぶせた笑話集が出版されつつも，1630 年前後を境に出版される笑話集の性質に変化が起きていることも英国道化の変遷を見る上で欠かせない事柄である。

上述した *A Banquet of Jests* では，出版業者 Richard Royston がそれまでの印刷産業が作り上げたタールトン神話を笑話集の系譜に位置づけ，史実化している。Royston は 1630 年に書籍出版業組合記録に本書を登録後，編集改訂を続けながら 1630 年，1632 年，1633 年，1634 年，1636 年（2 つに分冊），1640 年（合本），及び 1657 年にわたり複数回出版し，改訂や増補を訴えた宣伝文句を付け加えるばかりでなく，序文をつけ，刊行の歴史に留まらず，笑話の分類や配列を説明している。さらに，その序文も 1640 年には 'The Kings Iester to the Reader' と表題を替えて，それまでの匿名性を消し，タイトルでこそないが，ジェイムズ 1 世，チャールズ 1 世に仕えた道化 Archy Armstrong 作とする操作を行っている。Royston の出版文化における貢献は，出版業者としての仕事の拡大に留まらない。過去の出版物を追うことで，業界の動向を報告している。

> *The coorser Cates, that might the feast disgrace,*
> *Left out: And better serv'd in, in their place.*
> Pasquels *conceits are poore, and* Scoggins *drie,*
> Skeltons *meere rime, once read, but now laid by.*
> Peeles *Iests are old, and* Tarletons *are growne stale,*
> *These neither bark, nor bite, nor scratch, nor raile.*
> *Banquets were made for laughter, not for Teares.*
> *Such are these sportive* Taunts, Tales, Jests*, and* Jeeres.[20)]

Royston が 1634 年版に差し挟んだ，先行する笑話集を古臭いと述べる verse から，どのような笑話集が時代の変化に耐えうると考えていたかを

読み取ることができる。Roystonの *A Banquet of Jests* は前後の文脈を持たない，個々に独立したテーブル・トークを収集したものである。一貫して物語をまとめる，おどけ者のペルソナはもう無用とされているのである。しかも，1657年版では，同年に出版されたroyalist highwaymanのJames Hindを主役とした笑話集を「新しい」として加えている[21)]。ここに，無法者が笑話集の主役になったという大きな変化を認めることができる。一人のヒーローによる一貫した物語となったことも注目に値するが，王政復古以後の芝居において，笑いをもたらす役目が洒落者など物語性を担う人物に負わされてゆくことにも通じると考えられる。その前触れとして，シェイクスピアのAutolycusを挙げることができるだろう。道化は局所的な使われ方をする存在でなく，筋全体に係わる存在に変わると，もはや初期のたたずまいを保持することができなくなったとも考えられる。出版物上から道化の発達を追うことによって，普遍的な役割を担った登場人物として解釈する従来のやり方からは読み出せない道化像があぶりだせるはずである。

結論

タールトン神話はエリザベス，ジェイムズ及びチャールズ１世の時代にまたがり，笑話集とパンフレットの出版史上で作り上げられた神話であった。タールトンはパンフレットでは機知を働かし，著者の代弁者として風刺を効かす便利な人物としてブランド化されたのである。笑話集の歴史においては出版業者により伝統的な笑話集のシンボルとして，その存在を史実化された。そして，笑話集からヒーローが消え，物語性を失い，テーブル・トーク集がはやると，*Tarlton's Jests* も再版されなくなった。出版史上におけるタールトンの登場と退場が英国道化の短い歴史に重なっていたことがわかる。タールトン神話成立の原動力となった印刷・出版業の隆盛とその作用が舞台の道化の像にも及んで行くことは間違いなく，今後は印刷・出版業と劇作，上演の間で繰り返される循環について，さらなる研究

が期待されるのである。

注

1） 本稿は，2011 年英国 University of Birmingham The Shakespeare Institute に提出・受理された PhD 論文の一部であり，提出に先立って，2010 年 10 月 16 日第 49 回シェイクスピア学会で口頭発表した原稿に補筆を行ったものである。初期近代の書籍のタイトルについては，原則として現代綴表記に改めた。脚注，及び表の書籍タイトルについては，必要に応じて原綴りで記したものがある。表の略語 td. は trade date を指す。

2） Anon, *Tarltons iests. Drawne into these three parts. 1 His court-wittie iests 2 His sound cittie iests. 3 His country prettie iests. Full of delight, wit, and honest myrth* (London: Printed [by Thomas Snodham] for Iohn Budge, and are to be sold at his shop, at the great South doore of Paules, 1613). ほかに完本としては，1638 年版がある。

3） Andrew Gurr, *Playgoing in Shakespeare's London,* 2nd edn (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), pp. 126–33.

4） Richard Beadle, 'Crab's pedigree', in *English Comedy*, ed. by Michael Cordner, Peter Holland, and John Kerrigan (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), pp. 12–35 (p. 16).

5） 現在までのタールトン批評に特に大きい影響力を及ぼしたのは，David Wiles の *Shakespeare's Clown: Actor and Text in the Elizabethan Playhouse* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987) である。

6） Alexandra Halasz, "So beloved that men use his picture for their sings": Richard Tarlton and the Uses of Sixteenth-Century Celebrity', *Shakespeare Studies*, 23 (1995), 19–38 (p. 20).

7） Edwin Nungezer, ed., *A Dictionary of Actors and of Other Persons Associated with the Public Representation of Plays in England before 1642* (Ithaca: Cornell University Press, 1929); Robert Weimann, *Shakespeare*; Wiles, *Shakespeare's Clown*; J. H. Astington, 'Rereading Illustrations of the English stage', *Shakespeare Survey*, 50 (1997), 151–70; J. H. Astington, 'Tarlton and the sanguine temperament', *Theatre Notebook*, 53 (1999), 2–7; Mark Eccles, 'Elizabethan actors, IV: S to end', *Notes and Queries*, 40 (1993), 165–76; Halasz, '"So beloved"', pp. 19–38.

8） Richard Tarlton, *A Very Lamentable and Woeful Discourse of the Fierce Floods* (London: Printed by John Allde, 1570).

9） Gervase Markham は次のように言う。‘the Clowne, the Slouen, and Tom althummes, are as farre vnfit for this profession, as *Tarletons* toyes for *Paule*, Pulpit: betwixt which, though I make a comparison, yet to the place I reserue a reuerend regarde’. (*A Health to the Gentlemanly Profession of Servingmen* (London: Imprinted by W. White, 1598), sig. B3.)

10）略称 ‘Epistle’ と呼ばれる冊子 *Oh Read over D. John Bridges* (Europe [i.e. East Molesey, Surrey: Printed by Robert Waldegrave] [etc.], [1588]) の 19 ページに触れられている。Joseph L. Black による現代綴校訂版 *The Martin Marprelate Tracts: A Modernized and Annotated Edition* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), p. 21 参照。

11） John Lyly, *A Whip for an Ape* (London?: Printed by T. Orwin?, 1589?), p. 4. ここで言う *Scoggin's Jests* は，16 世紀半ばに Thomas Colwell がエントリーして出版した笑話集を指し，後述するように 1626 年の再版が現存する。Andrew Boorde, *The first and best part of Scoggins iests: full of witty mirth and pelasant shifts, done by him in France, and other places: being a preseruatiue against melancholy. Gathered by Andrew Boord, Doctor of Physicke* (London: Printed [by Miles Flesher] for Francis Williams, 1626).

12） Job Throckmorton, *M. Some Laid Open in His Coulers* ([La Rochelle: R. Waldegrave, 1589]), pp. 30–31.

13） Edward Arber, ‘To the courteous Reader’, in *An Introductory Sketch to the Martin Marprelate Controversy 1588–90,* ed. by Edward Arber, The English Scholar's Library of Old and Modern Works, 8 (New York: Burt Franklin, 1895), pp. 11–14 (p. 11); Raymond A. Anselment, ‘Rhetoric and the Dramatic Satire of Martin Marprelate’, *Studies in English Literature, 1500–1900*, 10 (1970), 103–19 (pp. 103–12).; Travis L. Summersgill, ‘The Influence of the Marprelate Controversy upon the Style of Thomas Nashe’, *Studies in Philology*, 48 (1951), 145–60; Donald J. McGinn, ‘Nashe's Share in the Marprelate Controversy’, *PMLA*, 59 (1944), 952–84.

14） Scott McMillin, and Sally-Beth MacLean, *The Queen's Men and Their Plays* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), pp. 53–54.

15） Thomas Nashe, *Pierce Penniless* [London: Printed by Abel Jeffes, for J. B[usby], 1592], sig. C.

16） Anon, *Tarltons newes out of purgatorie. Onely such a iest as his iigge, fit for gentlemen to laugh at an houre, &c. Published by an old companion of his, Robin Goodfellow* (At London: Printed [by R. Robinson] for T. G[ubbin] and T. N[ewman], 1590); Anon, *The cobler of Caunterburie, or*

An inuectiue against Tarltons newes out of purgatorie. A merrier iest then a clownes iigge, and fitter for gentlemens humors. Published with the cost of a dickar of cowe hides (London: Printed by Robert Robinson, 1590). 1608年の版も同じ副題を持つ。

17）Alexandra Halasz, *The Marketplace of Print: Pamphlets and the Public Sphere in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), p. 35.

18）Anon, *The tincker of Turuey, his merry pastime in his passing from Billinsgate to Graues-end. The barge being freighted with mirth, and mann'd with these persons Trotter the tincker. Yerker, a cobler. Thumper, a smith. Sr. Rowland a scholler. Bluster a sea-man. And other mad-merry fellowes, euery-one of them telling his tale ... The eight seuerall orders of cuckolds, marching here likewise in theyr horned rankes* (London: Printed for Nath: Butter, dwelling at St. Austins Gate, 1630).

19）Ben Jonson, *Bartholomew Fair* (London: Printed by J. B[eale]. For Robert Allot [etc.],1631), Induction; Richard Brome, *The Antipodes* (London: Printed by J. Okes, for Francis Constable [etc.] 1640), sig. D4v (II. 2).

20）*A Banquet of Jests* (1634, STC 1369) タイトルページの前の差し込み 'The Printer to the Reader' 参照。

21）Royston は，'Peeles *Iests are old*' の部分を 'Hind's *jests are new*' に差し替えている。*A Banquet of Jests* (1657, WING A3705) タイトルページの前の差し込み 'The Printer to the Reader' 参照。

Synopsis

Tarlton in Print: From Myth to History

Naoko Komachiya

Richard Tarlton, the Elizabethan clown, is frequently mentioned in many Elizabethan and Jacobean written works, one of which, *Tarlton's Jests*, gives accounts of the clown in performance and print. However, these reports are mixed up with popular legends and fables, so at this distance in time and without firm evidence, we cannot be certain that the published document is loyal to the authentic jests of Tarlton. On the other hand, *Tarlton's Jests* certainly provides clear evidence that the art of clowning in the late Elizabethan age relied heavily on the ability to come up with witty improvised responses to comments or requests from the audience. Its publication in later times also proves that Tarlton's reputation and popularity lived on into the Jacobean age.

Bridging the divide between theatre history and literary criticism, this study takes up the print industry as an agent for tracing the careers of clowns and fools in Renaissance drama. It examines how the image of Tarlton passed into literary texts, especially via jest-book printing. Through an examination of *Tarlton's Jests*, it also discusses the influence of Richard Tarlton: he was historically accepted as a brand or influential name in literary texts relating to contemporary religious controversy and pamphlet

writing. The myths surrounding Tarlton will be deciphered to explain the decisive role played by this instantly recognisable and immortalised clown in the overall evolution of the English clown. Historicised, Tarlton was endowed with a material identity, which completes the coming-into-being of clowns and fools in early modern play texts.